

# しあわせ

3 月 号



善人なおもて往生をとぐ。

いはんや悪人をや。

(法然聖人・親鸞聖人)

(善人ですら往生するのであるから、悪人はいうまでもない。)

## 「手を合わす母」

昨年未まで落ち着きを見せていた新型コロナウイルスが新年を迎えたとたん、爆発的な感染拡大となりついに国民の三〇四十人に一人が感染者という感染大国となった。

いつの時代にも疫病や天災、あるいは戦争で多くの死傷者がでていた。

お釈迦さまが、「諸行は無常であり、諸法は無我であって何一つ確かなものはない」とお示しになったとおりである。

この厳しい現実を踏まえる時、今、頂いているもの不思議と有り難さに手を合わさずにはおれない。

「ご縁、ご縁、みなご縁。困ったことも皆ご縁」人生の悲しみも苦しきも一つ一つが皆、幸せを確認する因(たね)となる。苦を転じて喜びに変える知恵。

「洪柿の洪がそのまま甘味かな」仏法の知恵は苦悩の人生を「ようこそ、有難う」と転じて下さる。

## 法座案内

△春季彼岸法要▽

三月 十八日(金) 昼席・夜席

十九日(土) 昼席

講師 服部法紹師

(豊浜町 登照寺住職)

△法味の会▽

三月 二十五日(金) 午前十時

お話し 自坊住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三  
栢原山 龍仙寺  
電話(〇八二二八)一四八二



善人でさえ往生するのだから、まして悪人はいうまでもない。『歎異抄』に伝えられる悪人正機（あくにんしょうき）の教えは、ながいあいだ親鸞聖人の専売特許のように考えられてきました。近年では、もともとは恩師である法然聖人の言葉だったことが分かっています。ただし法然聖人と親鸞さまでは、ことばの趣きは同じではないようです。

まず法然聖人が「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と説かれたのは、

「インドや中国の尊い祖師方（善人）ですら、弥陀の本願を仰いで浄土に往生されました。

まして罪ふかき凡夫（悪人）である私たちは、ただちに弥陀の本願に帰するべきです。もとより愚かな凡夫のための教えなのですから。」という意味であったようです。これは悪人より善人が優れているという世間の常識をふまえつつ、凡夫のための易しい教えとして、お念仏を勧めるための言葉だったのでしょう。

しかし親鸞さまの悪人正機の教えは、善人より悪人のほうが救われやすいという、常識では考えられない発想の上に立っています。

「善人であっても、みずからの善をほこるそのおごりを捨てて弥陀の本願に帰するならば往生できるでしょう。まして、もとよりほこるべき善もなく、ひとえに弥陀の本願を仰いでいる悪人が救われるのは当然なのです。」という意味で、親鸞さまは「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と説かれました。その言葉は、どれほど立派そうに見えても、人間の行う「善」に真実はないのだ、というまなざしによって貫かれています。

自分は正しい、と思っているかぎり、阿弥陀さまの本願にその身をゆだねることはできない。自分を「善」とし「是」とし「正」としてほこるその心こそが、無条件のすくい誓われた阿弥陀さまの慈悲のこころをはねつける。そう親鸞さまは仰ったのでした。

「大名もはだかで入る風呂のなか」

どんな立派な衣を着ていても、お風呂に入るためにはぜんぶ脱がなければならない。むしろ立派な着物（善）をかさねて着ているような人ほど、なかなかお風呂（本願）に入れない。つまるところ親鸞さまは、そういうことを仰ったわけですが、真つ向から人間の「善」に不信任をつきつける親鸞さまの悪人正機は、悪人より善人が優れているというわたしたちの常識に、まさしく逆行しています。劇薬といえば、これほどの劇薬はありませんが、一方、これほど人間を見抜いた言葉もないのでしょうか。

二〇一七年十二月八日付けのニューヨークタイムズ国際版に、親鸞聖人の悪人正機（あくにんしょうき）の思想が紹介されました。これからの暗黒の時代には、けがれない善人を尊ぶ思想ではなく、不浄の身を生きる思想こそが求められる…、という記事でした。

思い合わせると、今まさに、コロナ禍での

対処をめぐって、オリンピックの規定や判定などをめぐって、また国際情勢において、また日常生活において、わたしたちはみな、それぞれの正義をかかげて衝突をくりかえしています。あらゆる争いは、悪ではなく、善によつて起こっているのではないのでしょうか。

「一度書かれた文字は、そのまま動くことはありませんが、その文字を受け取った人の心の中で文字は自由に運動を始めます。」

以前、新聞で紹介されていた、生物学者の福岡伸一さんの言葉です。近年いわれるように、たしかに「善人なおもて往生をとぐ。いはんや悪人をや」という言葉は、法然聖人が語られたものだったのでしょう。しかしその言葉は、その言葉を受けとった親鸞さまのなかで自由に運動をはじめ、より深く、育っていきました。そして八〇〇年の時を超えて、現代のわたしたちをも照らし続けています。